

## パネル・フロアディスカッション

「次期高等学校学習指導要領と高大接続の本質」という観点から、いま育成すべき力とは何かをともに考える。

パネラー▶ 市川 伸一（東京大学大学院教育学研究科教授）

パネラー▶ 三浦 隆志（岡山県立林野高等学校校長）

パネラー▶ 大西 俊弘（大学コンソーシアム京高大連携推進室コーディネーター／龍谷大学理工学部准教授）

コーディネーター▶ 筒井 洋一（大学コンソーシアム京高大連携推進室アドバイザー／元京都精華大学人文学部教授）

**筒井** はじめに、本パネル・フロアディスカッションの趣旨についてご説明をさせていただきます。

我々としまして、シンポジウムを少しでも「主体的・対話的で深い学び」の場に行かないかと、昨年より試行錯誤をしまっていました。「主体的・対話的で深い学び」と申しまして、全員のご質問やご意見を取り上げることは難しいため、本パネル・フロアディスカッションの論点を共有させていただくことといたしました。具体的には、基調講演終了後、そして事例報告終了後に、それぞれの内容を踏まえ、皆様から論点をお出しいただきました。たくさんの論点をお出しいただきましたが、すべての論点を採用することは難しいため、上位概念でまとめる形で、3つの論点に絞らせていただきました。

1つ目は「**高大で育む主体的・対話的で深い学びとは、何なのか**」です。「高大」と付いているところがポイントです。2つ目は「**十分に基礎学力がついていない生徒・学生に対しては、高校・大学はどういう学びを提供すれば良いのか**」。3つ目は「**アクティブ・ラーニングの視点で授業を実践していく中で、学び手はどう変わるのか**」です。「『学び手』だから教える側は関係ない」という話ではなく、教える側は、当然ながら、学び手の変化を見たり、あるいは想

定したりするということが必要です。

本パネル・フロアディスカッションではまず、パネリストより、参加者の皆様からお出しいただきました論点等を踏まえ、コメントをいただきます。その後、すでに皆様にはグループを作っていますので、参加者の皆様同士でグループワークを行っていただきます。パネリストからのコメントを受けて、3つの論点に関するパネリストへの質問を各グループで1つにまとめていただきます。

それではまず、市川先生より、参加者の皆様からお出しいただきました論点等を踏まえコメントをお願いいたします。



**市川** 私からは3つの論点に即してコメントさせていただきます。

まず1つ目の「**高大で取り組む主体的・対話的で深い学びとは、何なのか**」についてです。

「主体的・対話的で深い学び」は、大学で言えば、例えば、ゼミで何か問題を決めてみんなで探究するといったことや、最終的には卒論がありますが、私が一番申しあげたいのは、「主体的・対話的で深い学び」はこれらゼミ活動や卒論だけではないということです。大学ではこのような大教室での一斉授業も、もちろんあります。私は、その日々の中での「主体的・対話的で深い学び」はあり得るという発想に立ちます。私も大学で、本日のような大教室での授業もしますが、やはり「教えて考えさせる授業」のように、「ここは事前に読んできてくださいね。わからないことがあったらメモしてきて」と言って予習をしてきてもらいます。「わからなかったところは今日の授業でわかるようになる」という気持ちで受けてもらう。これは主体性の始まりです。そして授業の最初にグループを組んでもらい、「わからなかったことをお互いに出し合って少し話し合ってみて」と言って協働も行います。その上で、私の方から補足的な説明をします。説明の後、「わかりましたか。わかったかどうかをチェックするためにお互いに説明したり質問してみましょう」というようなことを入れます。これは「理解確認」です。その次に、「この知識を前提とした上で、この問題について、みなさんどう考えますか」と、かなり深い問いを出します。まず各自で考えた上で、グループの中で出し合ってもらいます。本日、このような大教室であってもグループワークをやるぐらいですから、大学の教室でもグループワークは可能です。「自己評価」もやります。「自己評価」には、「今日の自分が気付いたこと、わかったこと」、また「さらに考えてみたいことはありますか」という項目もあります。皆様からご提出いただいた論点の中に「探究にどうやってつなげるのか」といったものもありました。日々の習得の授業を受けてさらに考えてみたいことをメモし、それが何枚か溜まったところで、「ではどれが一番考えるに

値する探究の問いか」ということを決めて、個人なり、グループなりで追究してもらいます。そうすると、普段の習得の授業でやっていることが探究へもつながっていきます。人の授業を聞いたり、人の意見を聞いたりすることで、自分なりの問いが生まれる。それが探究になるわけですから、そのような結びつきを図ってほしいと思います。



2つ目の論点は「十分に基礎学力がついていない生徒・学生に対しては、高校・大学はどういう学びを提供すれば良いのか」ですが、私たちの個別学習相談ではこれが一番のテーマです。みんな、自分の学力に悩んで個別学習相談に来ます。私たちは心理屋ですので、気になることは、どのような知識が欠けているかということの奥にある、その子なりの学習観や学習方略です。学習とはいったいどういう仕組みで成立するものだと思っていて、どういうやり方が効果的だと思っているのか。中学生ぐらいから、学習観や学習方略の違いにより、非常に大きな差が出てきます。「学習というのは断片的な知識や手続きをどんどん丸暗記して覚えこんでいくものだ」という学習観に立っていると、「今、成績が悪いのは努力が足りないからだ。もっとひたすら繰り返して覚えなさいといけない。今1時間やっていることを2時間にしないといけない」「今は1日10問解いているけど、これを20問にしないといけない」と、量にばかりに目がいってしまい、その結果あまり効果が出ず、「もしかしたら僕はもうだめなのかな」「高校

ではついていけない」と、挫折してしまいます。いったいどのような学習観、学習方略を持っているかという点に注目したいです。

3番目の論点は「アクティブ・ラーニングの視点で、授業を実践していく中で、学び方はどう変わるか」ということですが、本日、これもぜひ強調したかった点です。「アクティブ・ラーニングの視点」での授業を1年、2年やっていれば確かに成績が上がります。そこで「成績が上がるだけなのですか」と聞かれることがよくあります。それに対して「いや学び方が変わります」という話をします。何かを習得するときには、5分でもいいのできちんと準備段階を作っておくことが大事です。これは予習ですね。我々大人も難しい話を聞くときにはその人の本をパラパラとめくって読んでみて、「読んだだけではここはわからないな」と準備状態を作ってから聞くとずっとよくわかるはずです。テレビのニュースでは必ず最初に、一つの文で「〇〇が〇〇しました」という概要が入ります。新聞にはリード文がついています。概要を読んだから、「あ、もっとここが知りたいな」と思って中身を読むとよくわかります。それから、先生からの話の後に「理解確認」をします。わかったかわからなかったか、もやもやしているときには人に説明してみるのが一番です。うまく説明できれば、よくわかったということになりますし、うまく説明できなければ、どこがわかっていなかったのかがわかります。例えば、一般的な定義はわかるが具体例が出てこない場合は、「具体例を挙げてもらえませんか」と、もう一度先生に質問することもできます。この「理解確認」を授業の中で毎回入れるということです。それから「理解深化」の課題に取り組むときにも、自分のアイデアを人に的確に伝えたり、人のアイデアがよくわからないときに質問したりするなど、そのようなやり取りを入れます。他の人とのやりとりを通じて課題解決に近づいていくという感覚が協働的な問題解決

に通じていると思ってほしいですね。チームを組み、自分で考えたことを出し合い協力して問題を解決していくというのは、社会では盛んに行われています。そして、「振り返り」です。振り返りでは、今日の授業でいったい何がわかったのか具体的に自分の言葉で表現します。わからなかったところも具体的に表現します。そうすると、次のアクションに結びつきます。わからなかったことを放っておくとよくないので、自分で調べ直したり、教科書を見直したり、あるいは友達に聞いたり、先生に聞く。うやむやにしていると、何がわかったのか何がわからなかったのか、うやむやのまま、次の授業を受けて、また、もやもやが貯まるということになってしまいます。授業でも家で学習するときも、一回一回の学びで、自分は何がわかったのか、何がわかっていないのかをはっきりさせながら学習する。このような学び方を身に付けてほしいと思っています。以上です。

**筒井** 市川先生、どうもありがとうございました。それでは、三浦先生、お願いいたします。

**三浦** 皆様からお出しいただいた論点の中から少し補足をしたいと思います。

ポートフォリオの話をしていただきました。授業の終わりに、振り返りとして、生徒にポートフォリオを書かせますが、振り返りの作法がわからなければ、何をどのように振り返って書けばいいのかわかりません。例えば、2次関数の授業で、「2次関数を習った」と書くだけでは振り返りにはなりません。そこで、「今日の授業のなるほどと思ったことを書きなさい」というアドバイスをします。「なるほど」と思ったことがない子がいたら、それは、その教員の意図が伝わらなかったということになりますから、その授業の目当てやねらいが達成できているかどうかといったチェックにも活用しています。毎回、教員が生徒にフィードバ

ックしており、生徒も学年が上がるにつれて慣れてきて、書く量が増えたり精緻なことが書けたりするようになります。そのように、生徒の成長と様々な理解をわかることができます。

皆様からお出しいただいた論点の中で、「ポートフォリオをどのように活用するか」といったものもいただきました。生徒同士の評価に活用していますし、教員には、定期考査の問題を作成する際にポートフォリオを活用するようお願いしています。また、ポートフォリオを活用して、反復の反省会も行っています。子供たちも振り返る、教員も自身の授業を振り返る、というように、ポートフォリオをもとにして、ある種の小さなPDCAを回しています。特に若い教員にとって、それまでであれば、「みんなわかってくれているのかわかっていないのか、よくわからない」と言っていたのが、わかった点やわからなかった点を可視化できるようになったということは非常に大きいと思います。

「限られた人員の中でどのようにしてうまくやりくりをするのか」といった質問もいただきました。本校だけが最後までその文化が残っているのかもしれませんが、岡山県の北部の高等学校では、伝統的に、3年生の職員室と他の学年の職員室が分かれています。3年生の職員室が「進路指導室」という名前で、進路指導をする部屋に3年生の教員がいるという形です。職員室と進路指導室の階が一緒であればいざ知らず、本校は、2階と3階に分かれています。ですので、2階にいる教頭は3階の様子を知りませんし、私は当然1階にいて運動がてらぶらぶらと歩きまわりますが、みんなが何をしているのかわからない。どうやって先生方とうまくやりとりをするかというところはやはりあります。そのような中、ちょうど職員室に使われなくなっていた黒板がありましたので、すべてホワイトボードにして学校のすべての情報をここに集約しました。すると、みんなが必ずそ

こに見に来るわけです。たったそれだけで先生方の意識がガラッと変わりました。これは当時いた主幹教諭のアイデアです。他県で言う部長職は本県・本校では課長職ですが、その課長のとりまとめとして本校は今年から統括課長を置くなど、ある種の階層制をとっています。そのようなミドルリーダーが中心になって、アイデアを出したり共有したり実践したりするといったことを繰り返しています。校内におろすときも我々の中でPDCAを回しており、少ないリソースの中でもなんとかうまく回しているように思っています。

MDPにつきましては、2017年に文部科学大臣表彰をいただきました関係で、岡山県教育委員会の高校教育課のHPに、全体的な概要、また、今年度の取り組みや実践報告などの年間行事が間もなくアップされるかと思えます。MDPは、本校での「総合的な学習の時間」は、4つのステップに分かれています。4つのステップというのは、①活動を決めて②評価をして③成果を出し④振り返る、といったことで、これを單元ごとに繰り返しています。そして、そのフィールドを地域に置いています。これらがMDPの特徴であります。以上です。

**筒井** 三浦先生、どうもありがとうございます。それでは大西先生、お願いします。

**大西** 龍谷大学の大西です。簡単に自己紹介をさせていただきます。私は昔、26年間ほど高校の教員をしておりました。現在は龍谷大学で教職課程を担当しており、他の大学でも授業を担当しています。高大連携で言いますと、付属校で授業をおこなったり、「高校生のための学びの基礎診断」を研究している学校へ助言をしたり、SSH (Super Science High school) で課題研究の指導などを行っています。

いま、様々な方が、「仕事がなくなるのではないか」とか、「今ある仕事ではなく別の仕事

が誕生している」など、将来予想をされています。このような未来予想のもとで、子供たちがこれからどのように生きていくのかということが大きな課題となっており、ポスト近代型学力観と言うのでしょうか、90年代以降の世界の教育政策は、このような問題意識を持ちながら進められてきています。特に新学習指導要領は非常に気合が入っていると思います。本日の3つの論点について、私自身、明確な答えはありませんが、「主体的・対話的で深い学び」に関して、言いたいことはよくわかりますが、明確な定義ではないと思っています。また、「アクティブ・ラーニング」という言葉ですが、もともとはアメリカの大学で授業が成り立たなくなり、そのときの解決策として出てきたのがルーツです。50年ほどたってからそれを日本に持ち込み、そのまま適応しても決してうまくいくわけではないと思っています。

どのように取り組んでいくかはこれから我々が考えていかなければならないことであると思います。以上です。



**筒井** はい、どうもありがとうございました。パネリストの皆様から、皆様の議論のきっかけという形でコメントをしていただきました。

それではこれより10分間、グループワークを行っていただきます。基調講演中、また事例報告中、重要に感じたことをワークシートに書き出していただきました。そのワークシートをもとに、今日のお話はどうか話合っ

ていただき、もしパネリストに聞いてみたいという質問があれば、グループで質問を一つにまとめてください。グループワークでは是非お願いしたいのは、特定の一人の方で時間を占有しないように、グループの方が全員お話しできるようにしていただきたいということです。そして、今回、高校関係者の方に数多くご参加いただいておりますが、高校関係者の方でのみお話しいただくのではなく、高校関係者と、大学関係者や企業関係者というように、異なる属性の方々同士でお話しいただく方が非常に新鮮だと思いますので、是非そこを意識いただければと思います。では、よろしくお願いいたします。

#### ～グループワーク～

**筒井** はい、恐れ入ります。そろそろ10分になりますのでグループでの話を終了していただけますでしょうか。もし質問がある場合は、お一人質問者を決めてください。

それでは、皆様からの質問コーナーに移りたいと思います。手順をお知らせいたします。

本日は、3つの論点を提示させていただいています。各論点に関し、1番目の論点から順に質問をお受けいたしますので、グループで質問がある場合は、各グループで決めていただいた質問の方が手を挙げてください。それぞれの論点に関して、最低1つは質問を受け、パネリストからコメントをいただきます。

それでは1番目の論点「高大で育む主体的・対話的で深い学びとは、何なのか」について、どこかのグループで質問がございましたら挙手をお願いできますでしょうか。

**Q** 「高大で育む主体的・対話的で深い学びとは、何なのか」という論点についてですが、このグループでは、この論点とあわせて、「主体的・対話的で深い学び」をどう評価するのかということが問題になりました。例えば、振り返

りシートなどを活用し、自己評価を積み重ね、ポートフォリオなどに貯めていき、それが大学入試で活用され、面接でポートフォリオをもとに話す。そのような表現の訓練を受けてきた生徒とそうでない生徒とではすごく差が出てくるのではないか、そこで不利益が出てくるのではないか、と話していました。「高大で育む」ということは、大学を出て企業に就職するときの採用面接に関わる話だとも思います。「あなたは大学で何を学びましたか」と問われ、堂々と、自分が学んできたことを俯瞰的に言語化できる生徒・学生は評価されやすいだろうと思いますが、そうではない生徒・学生は不利になるだろうなと思います。ですから、「高大で育む主体的・対話的で深い学びとは、何なのか」ということと同時に、その評価を、採用側(企業、大学)がどのようにするのかということも、問題だなと感じています。生徒・学生によってそのような訓練を受けてきた子と受けてきていない子で差が出てくるという、その格差と言いますか、そのあたりをどのように考えたらいいのだろうかという話になりました。

**筒井** これは市川先生から順にコメントいただいた方がいいかと思います。1番目の論点に対して、どう評価するのかということ、また、トレーニングしている生徒とそうでない生徒で格差ができるということについていかがでしょうかという質問ですが、市川先生からお願いいたします。

**市川** 評価の問題が新たに出てきたと思います。今度の学習指導要領では、おそらく高校でも3観点での観点別評価が求められるようになります。ただ、そのような評価を単に先生から生徒に向かって通達するだけではなく、生徒は自分で自分をどう評価しているのか、その自己評価とのつきあわせを日常的ないろいろな場面でおこなって一緒に学習改善を図ってい

く、ということが求められていくと思います。しかも今お話にあったように、自己評価をもとにしながら、自分はどうのようことを学んできたか、あるいはどのような学び方をしてきたか、ということ了自己アピールすることは、これからもやはり求められると思います。これは今でもそうだと思いますし、これからもそういう力が求められます。そのときに、アピールする手段は何も言語だけではないと思います。言葉で話すのは苦手だけれども何か絵にしたり、スライドにしたり、場合によると動画にしたり、というように自分にとって得意な方法で、自分のしてきたこととその学び方をアピールできる表現力は、やはり社会から求められる力だろうと思います。

アピールする技術をきちんと教えられた子供と教えられなかった子供で差がついてしまうのではないかというご指摘ですが、当然、差はつきますよね。これはどの教科であろうが同じことだと思います。数学であれば数学を上手に教えてくれる先生について子供と、あまり上手に教えてくれない先生について子供で差がつきます。差がつかないようにするために、みんなに上手に教えなければいいのか、と言うと、そうはならないですよ。やはりみんなでそのような力がつくよう工夫をする。できれば、先生によって当たり外れがなくみんながそういう力をつけられるようにしていく。そのためには、本日のような場面で他の先生方と情報交換をする。それから、都市部の子供だけがそういう教育を受けて得をする、ということではなく、どの地域に住んでいてもそのような教育が受けられるよう、ツールを工夫するなど、機会を均等にする仕組みを作っていく。そういう方向にもっていくべきではないかなと思います。

**筒井** はい、ありがとうございます。では、三浦先生、お願いいたします。

**三浦** 今の市川先生のお話とかなり重複する内容になると思います。

確かに、大学の先生方と話をすると「入試改革で新たな入試が導入される中、それに対応できる訓練をしている子の方が強くなるのではないか」とご意見があります。例えば、本校は美作市という人口3万人も満たない田舎にあります。このような地域の子供たちが不利になってはいけないと思いますし、それを解決する一つのツールとしてPCがあると思います。PCを検索のツールだけでなく、他の場所や人と繋がる道具になると考えています。例えば、本校の生徒が教育や認知のことについて、東京大学の市川先生にお話しを伺おうと思えば、その生徒は市川先生にビデオ会議を申し込んで話をするような術を知っています。そのような術を、我々教員も知っておれば、我々も他の地域と繋がって、新たな知を知り共有できると思います。地域によっては、長崎の対馬のような離島で学ぶ子たちもいます。そのような子たちも同じように教育の質は保証されなければいけませんので、そのためのツールは整備されるべきだろうと思いますし、されていくものと考えています。

また、OECDの報告文を読んでも感じるのですが、やはりこれからの時代は、アピールと言いますか、自分たちが学んだこと、認知したことを「外化」する力が教育活動の中でかなり重要になってくると思います。私は岡山県の高等学校放送文化連盟の部長をさせていただいていますが、プロの方から「人にもものを伝えるときは、スキルではなくて、伝える気持ちの方が大切である」ということを伺ったりする機会があります。「そうか、伝えるということも単に原稿を読んでいるだけではなくて、自分の中で認知したことをまとめて、整理をして、どう伝えるかを考えなければならないんだ」と、気付かされました。複雑で先の見えない時代になっていくからこそ、そのようなことが大切にな

るのだらうと思います。また、以前テレビに、鉛筆画ですごく有名になった若者が出ていました。インターネットを介して、一芸に秀でた若者たちが出てくる時代です。自身に合った表現というものが、いわゆる個性にもつながりますし、多様性をより豊かなものしていくのではないかと考えています。以上です。

**筒井** はい、どうもありがとうございます。それでは、2つ目の論点に移らせていただきます。「十分に基礎学力がついていない生徒・学生に対しては、高校・大学はどういう学びを提供すれば良いのか」に関して、グループで質問があれば挙手をお願いします。

**Q** 本日はご発表ありがとうございました。2つ目の論点に関する質問ですが、1つ目の論点にも関わってくるかもしれません。

私どもの学校では、保育士養成や幼稚園教育を行っています。小学校、中学校でグループワークを積極的に行い、あれほど鍛えられてきているのに、高校になればどうしてあれほどしぼむのか、ということが現場での実感です。頑張っている子は頑張っているし、そこでの必要な学力も醸成されていて、成績は上がっていていると思いますが、そうではない、参加しているけれども、少し発言が遅れてしまい、結果発言できないなど、そのような子供たちをどのようにフォローしていけばよいのか、質問させていただきました。

**三浦** 高校になると、教師がトーク&チョークで進め、子供たちが活動しなくなる、というのは、私も40代半ばぐらいまでそのような教師でしたからよくわかります。言い訳をしようとして、大学入試があるからでした。これだけ覚えておかなければいけないからという呪縛がどうしてもありました。本当は、その呪縛から切り離さないといけないと思います。私は日本

史の教員ですから、日本史の授業でいいますと、詳細なプリントがあり、ところどころに穴が空き、その穴に番号がつけられていて、ずっと私がしゃべりながら、「ここはペリーだ」などと言いながら、穴埋めをしていくといった授業をしていました。子供たちはそれをただ書くだけです。子供たちはそれをただ書くだけです。40代の半ばぐらいで、これではだめだと気付きました。きっかけは入試問題です。東大の入試問題を解いていたときに、「こんなことをやっていたら東大の入試なんて解けないぞ」と気づき、ある年からバサッと、そういうプリント学習をやめました。やめると今度は子供たちが不安になって、「先生、プリントはないんですか」と言ってくるようになりました。グループワークを取り入れはじめると、ついには、保護者の方が出てこられて、「どうして三浦先生はプリント学習をされないんですか」とお叱りを受けました。ですが、最終的にはセンター試験の日本史の点数は近年になくよかったというオチが必ず付きます。自分で振り返ってみると、私は日本史の傲慢な教師だと思っていた。教えて教えて教えて、センター試験で100点を取らせる、ということに凝り固まっていた人間が、それを捨てるということは本当に大変な勇気がいることでした。しかし、その勇気を一度出してみるべきではないかと思い、行動に出た訳です。「いや、それは先生だからできるでしょう」と思われる方もおられるかもしれませんが、やはり少しずつそのような方向に変わって行きつつあると世の中の空気感を感じたからです。

本校の若い中堅の教員が「教科書の言葉は実はすごくよく練られている」と言うので、私が「その言葉を大切にすることも教師の仕事だと思う」ということを常に言っていると、あるとき、その教員が、教科書の「(1865年頃、)薩摩藩が開明政策に転換する」といった記述について「えっ、先生、薩摩藩は開国開明の考えを

すでに持っていたのではないですか」と気付くわけです。「調べてみればわかるけど、この本を読んでみて」と答え、一冊の新書を渡したのですが、こういうことは教師であっても知らないことがあるわけですから、教師も生徒と一緒にですね。生徒は、小学校、中学校で様々な取り組みをしてきて、今、高校にいるわけですから、やはり、その子が取り組んできたことをより一層引き出すような術や経験をさせることが大事だと思います。「それは中学校でもですか」と言われると、私は、「そうだ」と思っています。基調講演で天王寺高校の事例が紹介されていました。「いや、天王寺高校の生徒であれば予備校や塾に行っているから」と思われるかもしれませんが、きっと塾に行っていないけれども、これまでの取り組みの中で、自分の頭の中で組み立てられる子供たちがたくさんいるだろうと思います。

「できるだけトーク&チョークの授業ではないことを頑張りましょう」と、これからも言い続けますので、ぜひ保育士さんの養成に頑張ってくださいと思います。



**市川** ペリーの話が出ましたので、少し関連付けてお話しさせていただきます。「教えて考えさせる授業」は、小学校で取り入れているところもあります。それが中学校に進むと、「なんでうちの子供たちがこんなになってしまったのか」「あんなに元気でよく発言もし、手を挙げていたのがこんなにおとなしくなっ



って」と、不満を言う小学校の先生がたくさんおられます。中学校からすれば、そう言われると怒ります。これが日本の多くの地域で起こっていることだと思います。大事なことは先生が何を求めるか、だと思います。これは普通の授業でもテストでも言えることです。今、お話にあったように、社会科では大体穴埋め問題が多いですね。理科でも数多くあります。授業中の問答も、「これ誰だったかな?」「ペリー」とか、「いったいどんな条約だったかな?」「日米修好通商条約」と一言単語を言うだけです。中学校、高校では、このようなやりとりがものすごく多いですね。こちらが求めていることはそのような単語レベルの答えではありません。例えば、「ペリーが来航して、不平等条約が結ばれるまでの日本の中で起こったことについて、その経緯を説明してください」と、角度を変えてみます。当然、一応最初に、先生が言葉で説明をしますし、教科書にも出ています。そして、「ペアになって、それを自分なりの言葉で説明してください」と言うと、生徒同士の説明がすぐに始まります。もちろんうまく説明できない子もいますが、「説明できる子のお話を聞きましょう」「教科書を読み直しましょう」「先生を呼びましょう」と言います。そのような子がきちんと説明できることが先生の求めたい姿ですし、テストでもそのような問題を出せばいいと思っています。ところが普通は、「採点が大変だから」と、出しませんよね。大学に入れば穴埋め問題はまず出ません。「〇〇について論述せよ」「〇〇に対して、あなたの考えを述べよ」というような論述問題です。社会に出ても、おそらく「ペリー」というように、一言、単語を答えるのはクイズ番組くらいではないでしょうか。自分が調べてきたことをみんなにわかりやすく説明する、というのはプレゼンですね。書く、となると、報告書になります。やはり「そのようなことを子供たちに求めたい」という気持ちがあれば、子供たちにもじわじわと伝わっ

てくると思います。最初は難しいでしょうから、易しい課題でいいと思います。小学校1年生から取り入れているところもあります。例えば、繰り上がりのある足し算のやり方について、ブロックを使いながらペアになって説明します。学年が上がるにつれて、線分図を書いたりグラフを書いたりしながら説明することができる子供たちがだんだん増えてきます。そのような子供たちが中学校、高校に進学してくるわけですから、生徒同士で説明させる授業や説明型テスト問題を増やしていくと、だんだん授業が活性化していくのではないかと思います。

**筒井** はい、ありがとうございます。大西先生からもお願いいたします。

**大西** 高校生になって、元気がなくなるとかアクティブでなくなるというのは、一つは発達段階が大きく関係していると思います。私は昔、中高一貫校に勤めていました。中学校1年生から2年生に学年が上がると、人が変わり、冷めた人間になります。中学校から高校にかけてもかなり変わる、成長すると思います。それが一つですが、また、高校制度も大きく関係していると思います。やはり、日本の教育制度は硬直化しており、昭和22年に学校教育法ができてから、高校制度は基本的に変わっていません。戦前の旧制中学校のエリート教育を引き継いだものが日本の高校制度です。それに適応できない子供がたくさん出てくることは、ある程度わかっていることですが、それを変えることがなかなかできていません。クラスに一人でもセンター試験を受ける子がいれば、その子用のカリキュラムで進めてしまっている。そこが大きな問題なのだろうと思います。本質の根は深いと思います。

**筒井** はい、ありがとうございました。それでは、3番目の論点です。「アクティブ・ラーニ

ングの視点で、授業を実践していく中で、学び手はどう変わるか。あるいは、「学びはどう変わるのか」というようなことですね。教 hands ではなく、学び手がどう変わるのか、ということですが、これについて、ご質問がありましたらぜひ挙手をお願いいたします。

**Q** 私たちのグループでは、「アクティブ・ラーニングを授業で・・・」、というよりは、全体的に教育実践自体は、すべて、生徒と関わっている授業でも使いますが、三浦先生の事例報告のスライド65で「特別活動での『探究』」という言葉があり、「それがどういうことなのか知りたい」という話が出ましたので、質問をさせてもらいたいと思います。



**三浦** 「特別活動」は、学習指導要領の中で、例えば、学校行事や部活動のことを指しています。これは、本校が特有なのかもしれませんが。私は、「生徒が今までこうだから」「これがルールだ」と、ある意味、「おしきせ」になってしまっているのではないかと感じています。生徒の発案やアイデアを教師がどのように取り入れて、実現するかということが大事だと思います。当然失敗もあります。そのようなところでの探究と言いますか、大人たちとやりとりをしながら、今までのことを踏まえた上でどのように工夫をして、どのように実現していくか考え、取り組んでいく、これが特別活動だと思います。もちろん、卒業式をどうこうという話ではあり

ませんし、生徒が関わる中での特別活動ということですから、我々がいろいろなツールを使いながら、子供たちを探究モードにしていくことが大事で、まだまだ開発の余地があるのではないかと考えています。

本校について、10年前ぐらいに大変な時期があったという話をしました。私が教師になりたての30年前に、構内にバイクがきたりするような学校にいましたが、当時、林野高校にもそれに近いかなり荒れた状況があったようです。先生方が生徒指導でかなり疲弊してしまい、落ち着かせるために、生徒にやりたいことをさせるのではなく全て先生が決めるというような流れがありました。「いや、先生で全て決めることはやめませんか。生徒にさせましょうよ」と言うと、生徒自身で考え活動させることに対して大変な抵抗感を示している先生は「とにかく怖い。授業で生徒が立ち歩いたらどうなるんですか」と言います。「大丈夫だから。今の生徒が立ち歩いてむちゃくちゃになりますか」と返すと、「でも先生、先生が来られた時に、立ち歩いたり寝ていたりする生徒がいると、私の評価が・・・」と。「いやいや先生、そういうことではなく、やはりその生徒をどう育てるのか、どのような力をつけるかですよ」と返しますが、そのような言い方で懸念を示される先生は結構おられます。部活のことでこのような話もしたことがあります。ある部活で「先生どう進めていますか」と聞くと、「時間を守る、計画的に練習をするということを生徒に考えさせています」と言うのですが、「いやいや生徒にさせているのであれば、もう少しいい活動ができるんじゃないですか。もっと生徒に考えさせたらどうですか」という話をやはりするのですね。

我々教師が子供たちをどう育てるのか、どのような力をつけるのか、という視点に立ってみると、どのような活動も「探究」に落ちていくのだと思います。

**筒井** どうもありがとうございました。それでは、追加の質問を受け付けたいと思います。

**Q** ありがとうございます。三浦先生にご質問させていただきたいと思います。先ほどの「特別活動での『探究』」につきまして、「生徒にさせよう」ということがキーワードだと思いますが、「総合的な探究の時間」だけでは「探究」が回っていきませんので、非常に参考になりました。そこで、その前にある教科、科目での探究ということで、先生の学校では、どのような取り組みをなさっているか、具体を挙げて説明いただければと思います。お願いします。

**三浦** 本校は、例えばSSHの指定を受けている学校ではありません。ですが、先ほど市川先生が言われたように、教員は、生徒がやってみたくなるような問いを必ず残しておく、ということをしています。また、「今日授業で習ったことはこれで終わりではない」という話もよくしています。例えば、1年生の英語の授業で、関係代名詞を使って文章を書くという授業をしたときに、「世の中にある英語の文章や英字新聞などを読んでみて、関係代名詞がどのように使われているか調べてみましょう」と、教員は、何か発展性のあるようなことを必ず言っています。調べない子もいますが、そのようなことを教員が言っているので、図書館で英字新聞を読む子が最近増えています。ですから、単元で物事を考えると、授業と授業のつながりをどのように工夫するかということが大事だと思います。やはり、単に知識を教えて、「覚えたか？覚えたかどうか小テストするぞ」という授業ではやはり定着しません。活用してみる、自分で使ってみる、というように、覚えた知識を外に広げてみる活動が大事ではないでしょうか。今度の学習指導要領では、「総合的な探究の時間」は、いまの「総合」というよりももっと教科とうまくシンクロしていくような形

になっています。「総合」は「総合」、「教科」は「教科」、という形ではなく、両者がもっと、裏表といますか、スムーズな関係を持ち、生徒に力をつけていくようなカリキュラムが組めるといいのではないかと考えています。

**筒井** はい、ありがとうございました。では次の方、お願いいたします。

**Q** 先ほどの2番目のご質問と重なる部分もあるかと思いますが、実際に各校もアクティブ・ラーニングの授業をされていると思います。本校もアクティブ・ラーニングを導入して実際に展開しているところです。そこで実感をしていることですが、アクティブな授業になり、生き生きと頑張る生徒が出てきて、力が付いたという生徒もたくさんいますが、その一方で、担当している先生方から、「成績的に中位の生徒、さらには十分に基礎学力がついていない生徒にしっかりと目が届かない形になってしまっているのではないかと」いった声があがっています。言ってみれば、「学力格差が、ある意味では付いたのではないかと」という、こういうご指摘でございます。このアクティブ・ラーニングのいい点というのはたくさんあるかと思いますが、その一方でしっかりと見ていかなければならない課題もあります。そのような点について、もう少しご教示いただければと思います。市川先生お願いできますでしょうか。よろしくお願いいたします。

**市川** 確かに一口にアクティブ・ラーニングと言ってもいろいろですし、先生がおっしゃられたように、いま実践されているアクティブ・ラーニングが学力の高い子にとってはそれをさらに伸ばすことにつながっている一方で、学力が中位の子、あるいは低い子にとってはあまり学力の伸びにつながっていないとすれば、そういうタイプのアクティブ・ラーニングになって

いる可能性があります。また逆のことも言えます。学力の低い子たちは伸びたけれども、学力の高い子たちはさっぱり伸びない。それは例えば、後者で言えば、「学力の高い子は低い子にとにかく教えてあげましょう」と、教えるばかり、いつも教えられるばかりで、確かに、学力の低い子は教えられて成績が上がったが、学力テストをしてみると、学力の高い子は前とほとんど変わっていないというようなことも実際にグラフで見たことがあります。「やはり学力の高い子も伸ばさないといけないのではないか」ということがその学校で話題になっていました。前者のタイプに関しては、例えば、学力の高い子は、グループワークでわかると、もうすぐに答えがわかってしまい、それで「このグループはできたからいいや」となってしまいます。「一人がわかったらこのグループはOKだ。発表のときはその人が発表すればいいや」ということになってしまうと、わかった人にとっては、自分で考えて問題解決の学習になっても、他の子供はただ聞いただけになってしまいます。これではやはり伸びないですね。わからなかった子も本当は自分が説明できるくらいに納得してほしいわけです。私はそういうときには「全員が納得できる、説明できるようになる、ということを目指して掲げてほしい」と言っています。

そして、どれだけ一緒にディスカッションができたか、ということも重要です。みんなと一緒にディスカッションをするためには共通の知識の基盤が必要です。ある程度共通の知識があるからこそ我々はコミュニケーションをとることができるので、先生が教えるという部分はやはり大事です。基本的なことや既習事項があやしい子もいますから、そのような子にはちょっとした復習も兼ねて、「今日の授業での基本的なことはこうだよ」ということを、きちんと教えておく。そうしないとなかなかディスカッションにも参加できない、ということになっ

てしまいます。

先生がおっしゃられた状況がなぜ起こってしまうのか分析をしていただき対応策を取っていただくことは必要かなと思います。

**筒井** どうもありがとうございます。もう少しご質問をお受けしたいのですが、時間が無くなってしまったので、最後はパネリストから、このパネル・フロアディスカッションで気付いたことを順番にお話しさせていただきたいと思います。

**大西** 私は、日本の先生方は非常に真面目ではないかと思っています。アクティブ・ラーニングという言葉が出てきたら、それを一生懸命に勉強して、適用しようと思われているのではないのでしょうか。しかしながら、基本は、やはり子供たちが理解しているかどうかであり、それをきちんと確認しながら伸ばしていくことだと思います。新しい流れが出てきたからといって、それだけに頼るのは間違っているのではないのでしょうか。特に、アクティブ・ラーニングに関して、私はいろいろな学校の授業を見に行くことが多いのですが、授業の最中に「10分ぐらい机をひっつけて討論しなさい」というような場面を必ず設定されているという学校が多くあります。しかしながら、それが非常に形骸化している場面が多いように感じます。最初の慣れないうちはそういうこともあるかもしれませんが、だんだんそれを改良していくことが必要なのではないかと思っています。

**三浦** 本日はありがとうございました。

アクティブ・ラーニングに関しまして、私も、以前、アクティブ・ラーニングを広めようとしてあちらこちらに行っていた時期がありました。グループワークをしても参加しようとしないう生徒、フリーライダーと呼んだり、悪い言い方だと評価のタダ取りといったりするようなケースもありますが、なかなかうまくグループ

ワークに入っていけない子供たちも確かにいます。個性を認めて行く中で、そのような子供たちには、「話せなくてもいいよ」と言うなど、ゆったりした気持ちで取り組んでもらえるように心がけるようにしています。単に話しているだけでは、そのアクティブ・ラーニングは深い学びになっていないわけですし、ただ何かを話していて「楽しかった」というのはまったく言語道断だということはおわかりだと思います。

その時間に身に付けさせたい力をゴールにおいて、教師が段階的に発問しながら、メインクエスチョンにもっていく。生徒が本当にわかっているか確認しながら、どうすればわかるかと考え、実践し、そして振り返り、また実践する、ということを繰り返しながら、教師の知として貯めていき、このような研究会のような場で発表をして世間に評価を問うてみる、というようなことがどんどん広がればいいなと思っています。ありがとうございました。以上です。



**市川** 改めて感じたことですが、先ほど大西先生もおっしゃったように、何か教育の中で流行り言葉が出てきたときに、それに100%乗ってしまう必要はないと思います。先生方はおそらく教育学者よりも、教育行政の方よりも、一番、バランス感覚をお持ちのはずです。ですから、アクティブ・ラーニングという言葉が流行ってもアクティブ・ラーニングだけで100%の授業ができるわけでは当然ないでしょう。やはり教

師が工夫をして、わかりやすく教えるという場面は必要です。そうして共通の知識の基盤ができてこそ、多くの子供たちがアクティブ・ラーニングに入っていきますし、盛り上がりますし、最終的に深い学びに至るようになります。ですから、その結びつきですよ。これまでの高校であれば、先生が解説するという場面はかなり多かったかもしれませんが、その解説の工夫ということは残しながら、子供たちの活動を入れることによって、もっと深い学びになるのではないかと思いますし、解説を聞くだけでは育たなかった力が育つと思います。これは表現力、発信力ということですね。これらをバランスよく育てていく、ということが改めて必要ではないかと思いました。

**筒井** はい、パネリストの皆様、どうもありがとうございました。是非皆様をお願いということで最後にお伝えをいたします。

シンポジウムに参加し、参加者の皆様がどのようなことを得られるのか、ということですが、一つはパネリストやコーディネーターの良し悪しです。「あ、いい話が聞けた」とか、「いい議論が聞けた」とかは大切なことですが、ただ、これが全てではないということです。このシンポジウムに参加した皆様が、どのように消化をして、今後どのように行動されるかが、やはり重要だと思います。もちろん、「今日はあまり参考にならなかった」「あるいは参考になった」「よかった」「よくなかった」と、いろいろあるかと思いますが、いずれにしても皆様自身が、どのように消化していくかということが非常に大切ですので、是非とも、よく聞ける参加者でなく、行動する参加者を目指していただければと思います。

それでは本当に大変つたないコメントーターでしたけれども、パネリストや参加者の皆様のご協力でもって本日を終わることができました。どうもありがとうございました。

